太平洋戦争期の日本におけるフランス文学受容：その一

渋　谷　　豊

キーワード：太平洋戦争　フランス文学受容　比較文学

1．はじめに

明治期から今日に至る日本のフランス文学受容の歴史を辿ろうとするとき、太平洋戦争期をどう捉えればよいだろうか[1]。

戦争中のフランス文学の教育・研究が低調であったことはまちがいない。そもそも厳しい思想統制、出版統制のもと、外国文学を自由に研究し、その成果を思い通りに発表できる状況ではなかった。戦時下の困難を伝えるフランス文学者の証言として、佐藤朔のエッセー「昨日は秋、今は冬」の一節を引いておこう。佐藤朔は1905年（『海潮音』刊行年）に生まれ、1930年に慶應義塾大学文学部仏文科を卒業、その後、同大学文学部の助手および大学予科教員を経て日米開戦直後の1942年には同大学文学部講師を務めていた[2]。彼は「三〇年代の日本は満州事変から、二・二六事件、ノモンハン事件へと進み、軍国主義一色となって、第二次世界大戦へと突入して行った。そのために外国文学の研究は、次第に窮屈な思いをせざるを得なかった[3]」とした上で、こう述べている。

> 話を大学に戻すが、昭和十五年（一九四〇年）ごろから、次第に戦時色が学園の中にも立ちこめて来て、学生に対しての軍事教練の強化、野外演習の拡大、学業短縮、学徒動員などが続いて、大学での研究、教育は著しく困難になり、それらを一時中絶せざるを得なかった。そのために予科のフランス語教育も、本科でのフランス文学も講義がなくなり、授業の代りに教師も学生も勤労動員で工場などで働くことになった。ことにフランス語は敵性語ということで疎かにされ、私も一時教職から離れた。そして、大学では「国防論」などという講義まで行われ、また図書館の貴重本を新潟県十日町にある西脇家の倉庫に疎開したりした。
>
> 昭和二十年五月に三田の本塾が空襲に見舞われ、大講堂や多くの教室が焼失した。
>
> こうして一九四五年に戦争は終った。しかし、大学に戻ってこない学徒兵がいたし、フランス語の教師の中には消息不明のものも何人かいたし、疎開したまま帰って来ない人もいた[4]。

---

[1] 本稿は筆者が研究分担者として参加している科学研究費基盤研究(C)「世界戦争とナショナル・アイデンティティ―アジア太平洋戦争期の他者体験と文学言説」（課題番号20K00323）の成果の一部である。

[2] 丸山信「佐藤朔略年譜」『藝文研究』vol. 23（佐藤朔先生還暦記念論文集）、1967年２月、p. 351。

[3] 佐藤朔「昨日は秋、今は冬」生島遼一他著，大高順雄編『フランス文学とわたし』平凡社、1985年、p. 85。

「一時教職から離れた」のは何も佐藤朔一人に限ったことではなく、「余程特別な条件の人を除いて、戦争の末期、フランス語の教師の仕事を続けていられる人は殆どいなかった[5]」（杉捷夫）という。フランスの新刊書を入手することはほぼ不可能で、当時東大仏文科の助教授だった鈴木信太郎は後に「忘れもしない一九四〇（昭和十五）年の初め、最後のフランスからの小包を受取って以来、私は新刊書を見ることが出来なくなった」と振り返り、戦時期の日本の状況を「鎖国状態」と呼んでいる[6]。戦前に苦労して集めた貴重な書籍も、都市部への空襲が激化すると、地方の比較的安全な場所に避難させざるを得なくなる。慶応義塾の図書館の希少本は「新潟県十日町の西脇家の倉庫」に避難させたとあるが（「西脇家」とは西脇順三郎の家）、東大の仏文研究室の蔵書は松本市の中学校の音楽室に運び込んだのだという[7]。

こうした状況下にフランス文学の研究が活況を呈したはずもない。だが、それでは研究が完全に「中絶」し、何の成果も齎されなかったかと言えば、そんなこともない。戦争中は研究史上の空白期などではなかった。戦前から始められていた研究が、戦時下にもまるで時局に背を向けるようにしてこつこつと続けられ、驚くべき成果を生んだケースもある。1943年12月７日に東大文学部に提出された鈴木信太郎の博士論文『ステファヌ・マラルメ詩集考』の厳密なテキスト・クリティークがそうだ。（ただしこの論文が公刊されるのは戦後になってから。）一方、フランス文学とその研究が、困難な時代を生き抜くための指針と支えになることもあっただろう。当時、東大仏文科の講師だった渡辺一夫は、後に『フランス・ユマニスムの成立』の序章において、

> 一九三三年の一月に、ドイツの首相に就任したアドルフ・ヒットラー Adolf Hitler は、三月には独裁権を掌握するにいたったが、この時期から、第二次世界大戦までの、あわただしい、そして暗い雲が刻々と立ち籠めてくるフランスでは、狂信的なものに対する理性的なものの抵抗が、様々な形で現れていたと思う。その間の細かな出来事や主要な著作や発言について、ここで論ずるわけにはゆかないが、ユマニスム humanisme についての論議が盛んになり、破滅しようとする世界の救済法を、ユマニスムの再検討乃至ユマニスムの意義の拡充に求めようとした人々が輩出していることは指示されてよいであろう[8]。

---

[4] 同前、p. 94–95。

[5] 杉捷夫「フランス文学六十年」生島遼一他著，大高順雄編『フランス文学とわたし』前掲書、p. 232。

[6] 『マラルメ詩集』鈴木信太郎訳、岩波文庫、1963年、p. 295（訳者の「後記」から）。大戦中の同時代的証言の一つにフランス文学者、翻訳家の根津憲三（一九〇五年生まれ。早稲田大学フランス文学科の創設者である吉江喬松の弟子にあたる人物）の言葉がある。「フランス敗北以来、フランスの新聞雑誌は勿論、新刊書類も全くわが国に入らなくなってしまったのであるから、日本にゐて世界大戦下のフランス文学の情況を知らうとすることは全く無理なことと云わざるを得ない。われわれは英米に於ける新聞雑誌や、支那大陸で出ている外字新聞などによって、辛うじて現在のフランス文学の片鱗を知ることで満足せざるをえないのである。」根津憲三「敗戦後のフランス文学」『新創作』1942年１月、p. 27。

[7] 『渡辺一夫　敗戦日記』串田孫一・二宮敬編、博文堂書店、1995年、p. 22–23。

[8] 渡辺一夫『フランス・ユマニスムの成立』岩波全書セレクション、2005年、p. 10。

と述べているが、戦争中の渡辺一夫自身の仕事、即ち、ルネサンス期を代表するユマニストの一人ラブレーの研究・翻訳や、筑摩書房版『ヴァレリー全集』への参画などもまた「狂信的なものに対する理性的なものの抵抗」に他ならなかったのではないだろうか。（ただし『ヴァレリー全集』は未完成、ラブレーの翻訳も戦争中に刊行されたのは『第一之書』だけである。）逆に日本のフランス文学研究が時局に迎合したり歪められたりしたケース、また日本の国粋主義的発想と親和性の高いフランスの文学作品が珍重されたケースなどもあったはずで[9]、そう考えると、日本におけるフランス文学受容の歴史を辿ろうとする者にとって、太平洋戦争期は空白期どころか、様々な問題を孕んだ注目すべき時期に見えてくる。ただし、その内実はまだ十分に解明されているとはとても言えない。

大体このような見当のもとに、今後、戦時下のフランス文学受容の実態、意義、問題点を明らかにしていきたいと考えているのだが、本稿ではその前段階として、太平洋戦争中の日仏関係を概観し、戦時下の日本におけるフランス語の教育・研究について幾つかのデータを整理するに留めたい。

２．太平洋戦時下の日仏関係

まずは当時の日本とフランスの関係を粗描しておく。

1936年11月に日独防共協定が、そして37年11月には日独伊三国防共協定が成立していたのだから、39年９月にポーランドに侵攻したドイツに英仏が宣戦布告をして第二次世界大戦が始まったとき、フランスは日本にとって敵性国に他ならなかった。ただし、それから二年以上が経って太平洋戦争が始まったときには情勢が一変している。1940年６月にドイツ軍の侵攻によりパリが陥落し、その翌月にはペタン元帥を国家主席とする親独的な政権がヴィシーに成立していたのである。もちろん、それとは別にロンドンに亡命したド・ゴールの自由フランスが存在したが、日本はヴィシー政権をフランスの政府として承認し、特に仏印ではフランスとの「協力関係」の形成に努めていた[10]。1940年９月の北部仏印進駐も翌41年７月の南部仏印進駐も、フランス側の合意のもとに実施したのである。従って、日米開戦時にフランスが日本の完全な敵であったとは言えない。1942年４月には一度失脚したピエール・ラヴァルがヴィシー政権に復帰して内閣改造を行い、対独協力をさらに推し進めるのだが、それに応じて同年５月、日本のある雑誌に次のような記事が載った。これはもとより当時の様々な声の内の一つに過ぎないが、こういう声もあるにはあったのである。

> フランスも愈々親独派が勝利を得て四月二十日にラヴァル内閣の出現を見るに至った。

[9] こうした点については、以下の論文が示唆に富む。萩原直幸「岩波文庫の検閲と『オーベルマン』の削除をめぐって」『フランス文学』日本フランス語フランス文学会　中国・四国支部、第30号、p. 24-43：田中琢三「ポール・ブールジェ『死』と二つの世界大戦：戦時下の日本における仏文学受容の一側面」『比較日本学教育研究センター研究年報』第７号、p. 293-300：田中琢三「戦時下の日本におけるモーリス・バレスの受容について」『お茶の水女子大学人文科学研究』2016年、p. 131-140。

[10] 仏印における日仏の協力体制については立川京一「戦時下仏印におけるフランスの対日協力――一九四〇～四五年――」『防衛研究所戦史部年報』1999年３月、p. 41-56を参照のこと。

そして愈々益々ドイツと接近してきたのであるが、この形成を見て取った英国は、無残にも去る四月二十五日、殆ど無防備なるパリーに数機の空襲を敢行し二千人からの死傷者を出さしめた。

今さら乍らアングロサクソンの残虐性を痛感せずにはをれない。

而して、ラヴァール内閣の出現後、英米は愈々フランスに対し、意地悪さを頻りにやって来た。

アフリカの仏領マダガスカルに英軍は上陸し、フランス虐めにかかってゐる。［中略］

フランスは今一歩進んで日独伊枢軸側に、断然仲間入りするが、いいのである[11]。

こういう（粗雑と言えば粗雑な）考えを悲憤慷慨調で表明すれば、東大仏文科出身の詩人、三好達治が1942年11月19日の朝日新聞に発表した詩「起て・フランス」になるだろう[12]。

ところで、上の一文に示された同情の念が、他国（ドイツ）に占領された国に対する蔑みの念と紙一重であることは想像に難くない。事実、「フランスは『敗戦国』というので、英米のような『敵性国』についで、冷たい扱いをうけました」という証言（中村光夫）もある[13]。当時、フランスやフランス人に対して日本がどのような視線を向けていたのか、その実相の具体的な捕捉のために、1938年にアヴァス通信の東京支局長として来日し、45年の日本敗戦まで日本に留まっていたフランス人ロベール・ギラン Robert Guillain に着目してみたい。

ロベール・ギランが日本敗戦まで日本に留まったのは、自らそれを望んでというより、むしろ日本を離れる術がなかったためらしい。彼の自伝的著作 *Orient Extrême, une vie en Asie*（矢島翠訳『アジア特電1937～1985――過激なる極東』）によれば、在日フランス人にとって日本の真珠湾攻撃が「ただちに、災厄となって[14]」ふりかかったのだという。

いまやわれわれは戦争が終わるまで、日本列島に足どめをくらったのだ。英国人と米国人には、欧米在住の日本人と引換えに＜交換船＞による帰国が認められたが、われわれは駄目だということが実際にあきらかになった。フランスは敗北し、世界の紛争から除外されていたから、われわれは番外の国民と見なされていた[15]。

こうして「番外の国民」として日本に取り残されたフランス人はどのくらいいたのか。ギランは「わたしには正確な数字はわからずじまいだったが」と断りつつ、「二、三百人いたは

[11]「フランスの運命」（無記名）『実業の世界』1942年５月号。ドイツ占領下のフランスに対する連合国による空爆については Andrew Knapp, *Les Français sous les bombes alliées : 1940-1945,* Tallandier, 2014を参照のこと。

[12] 三好達治「起て・フランス」『朝日新聞』1942年11月19日朝刊、第４面。その後半部分は以下の通り。筑摩書房刊『三好達治全集』第二巻（1965年）に収められたテキストとは若干の異同がある。「起て　佛蘭西！／起て我が陣営の勇武の友／今こそ起ちて　かの古きアングロサクソンが／譎詐つくるところなく　貪婪とどまるところなき／一切虚偽の藪淵を／かの仮面紳士道徳と　かの僭称人道主義との／一切悖徳の病竈を／渾地表外に逐ひ出さん／起て我が陣営の勇武の友／起て　佛蘭西！」

[13] 中村光夫「印象」『Spicilegium Amicitiae』（『渡辺一夫著作集』増補版10偶感集上巻附録）筑摩書房、1976年、p. 34。

[14] ロベール・ギラン『アジア特電1937～1985――過激なる極東』矢島翠訳、平凡社、1988年、p. 118。

[15] 同前、p. 118-119。

ず」で、「その一部は修道士、修道女」だったと述べている[16]。一口に在日フランス人と言っても様々な立場があっただろうが、しかし、総じて彼らの運命は「インドシナの運命と一蓮托生[17]」だった。少なくともギランにはそう感じられていた。

> インドシナにドゥクー提督の率いるフランスの民生を残しておくことが日本側にとって必要である限り、われわれも東京で比較的こともなく過せるだろう。たまたま、在日フランス人社会の財政は、インドシナ米の売却による積立資産のおかげで保証されており、われわれは最後まで、この財源に頼ることができた。従ってわれわれは、たとえばスイス人やスウェーデン人と並んで、中立国人としての待遇をうけていたのだが、ただし、つねに目の離せない、うさんくさい中立国人ではあった。そこで常時、警察の――正確にいえば各種警察の、監視下に置かれることになった[18]。

仏印で日本とフランスが協力関係を維持している限りで、中立国人として「比較的こともなく過せる」。ただし、中立国人とは言っても「うさんくさい」中立国人であって、「各種警察」の「監視下」に置かれている。この居心地の悪い曖昧な立場が、ギランによれば大方の在日フランス人の境遇だったようだ。

「うさんくさい」国民として被った被害について、ギランはこう述べている。

> 実際、わたしの身辺には、軍警察であるケンペイタイと特別政治警察のトッコー［特高］の要員や、所轄の警官らがわが家の周辺に出没していたし、しまいには報道関係を監視する係の警官が、支局のあたりをうろついていた。フランス人のもとに出入りする日本人はだれもかれも訊問をうけ、おどかされていた。警察はむかしからのつきあいを続けるのは大目に見たが、新しい交際と見ると追及した。

一方、「比較的こともなく過せる」ということの具体例としては、ギラン自身は言及していないものの、彼が巴里会に参加していたことを挙げることができるだろう。

巴里会というのはフランス滞在経験のある日本人の有志が1930年に東京で結成した会で、「日仏親善ヲ目的トスル自由ナル社交団体」（「巴里会ノ規約」から）である[19]。日米開戦の前年あたりから巴里会の活動は以前ほど活発ではなくなったようだが、開戦後も会が直ちに消滅することはなかった。機関誌『あみ・ど・ぱり』も（太平洋戦争中は休みがちになったようだが、それでも）1943年12月５日に第九巻第二号が刊行されたことは確認されており、現在ではこの号を復刻版で読むことができる[20]。それによれば当時の会長は元外務大臣の佐

---

[16] 同前、p. 119。
[17] 同前、p. 119。
[18] 同前、p. 119。
[19] 巴里会およびその機関誌『あみ・ど・ぱり』については、和田博文監修『ライブラリー・日本人のフランス体験』柏書房の第三巻（鈴木貴宇編）、第四巻（宮内淳子編）、第五巻（西村将洋編）（いずれも2009年刊）を参照のこと。『あみ・ど・ぱり』のバックナンバー、巴里会の関連資料、編者による詳細な解説が収められている。
[20]『ライブラリー・日本人のフランス体験』前掲書、第五巻（西村将洋編）、p. 429-458。

藤尚武であり（会長就任は1938年４月）、役員名簿には若槻礼次郎、曽我祐邦、稲畑勝太郎といった政治家、実業家の名と並んで、川路柳虹、西條八十、海老原喜之助、小山敬三など文学者や画家の名がある[21]。また同号には「巴里会例会記[22]」と題する例会の報告記事が載っていて、第百五十三回例会が９月14日午後６時から、また第百五十四回例会が11月14日午後６時から開催されたとあり、それぞれの会の出席者名簿が添えられているが、そのどちらにもロベール・ギランの名が載っている。ちなみに第百五十三回の会場は芝区田町の「つかさ」、第百五十四回の方は台東区柳橋の料亭「二葉」であり、その「二葉」での歓談の様子はこう伝えられている。

> 当日の出席申込者で無断欠席の人が三名もあつたことは返す返すも残念であつたが、申込無く当日突然の出席者が逆に二名あり、差し引き拾壱名は寂しい会のやうではあるが、当夜は仏蘭西人会員が却って多く珍しい会となつて、徳川義知氏の邦楽の「間」の話や、最近の仏印上海方面の視察から帰つたバシ陸軍中佐の土産話、当夜始めて出席された無線技士のラ・ラン・ボネール氏の日本の印象談が飛び出し、果はフランス語で謎々の応酬に、我方にはサック・ド・アベの坂部甲次郎氏あり、櫻田佐氏あり、鶴が片足で立つ理由を諒解せしめられるなど、和気藹々裡に夜の更け行くも忘れ、隅田の流れに轟々たる省線電車の響も聞えずデザルトに入り用意された一山の吉田聖一氏寄贈になる柿を頒ち、午後九時過散会した[23]。

なお、この「巴里会例会記」のページには前年の1942年11月14日にオペラ歌手三上孝子が所有する「箱根入生田の蜜柑山山頂」で「巴里会員接待野宴」が開かれたことも記されていて、そのときのスナップ写真が添えられているが、その写真にも数名の日本人と共に卓を囲んで寛いでいる（ように見える）ギランの姿がある。

ただし、こうして「和気藹々」とした日仏の親睦会を楽しんでいられたのも、仏印における日仏の協力関係が維持されている限りでだった。フランスでヴィシー政権が崩壊し、1945年３月９日に日本軍が明号作戦により仏印武力処理を行うと事情は一変する。ギラン本人の言葉を引こう。

> 大空襲があった三月九日、極東で第二のドラマが展開した。インドシナ駐留の日本人が強権を発動し、血なまぐさい戦闘と数多くの残虐行為もないではなかったが、フランスの行政に終止符をうって、軍隊を武装解除したのである。その余波はただちに在日フランス人に及んだ。かの空爆の翌日から、東京、神戸、大阪その他の地域にいるフランス人は、インドシナのフランス人と同様、今後は敵性国民として処遇する、との警察の通告があった。われわれは強制収容されるという。アルセーヌ＝アンリ大使のあとを継いだコスム大使はヴィシー政権支持派だったにもかかわらず、大使館を閉鎖せよとの命令を受けた。われわれは強制収容所行だろうか。すでに日本では組織的にことが運びにく

[21] 同前、p. 455。
[22] 同前、p. 444-445。
[23] 同前。

> く、かつ食料欠乏の状態にある以上、実施することは困難だし、高くつくだけだろう。むしろわれわれをどこか辺鄙な村に送り込み、ケンペイタイの監視下に強制定住させる案が選ばれた[24]。

ギランが送り込まれたのは軽井沢だった。そこで彼は五か月間軟禁された末に終戦を迎えるのである。

３．フランス語の受難

そういうわけで太平洋戦争中の日本ではフランスに同情する声があがることもあり、ある時期までは日仏交流の催しが行われてもいたのだが、しかし、戦時下の日本でフランス語のステータスはけっして高いとは言えず、むしろこの言語は「敵性語」として貶められていた。本稿の冒頭で引いた佐藤朔の文章に「ことにフランス語は敵性語ということで疎かにされ［……］」という一文があったが、このような証言には実際、事欠かないのである。戦時下に中学生だった詩人の窪田般彌（後の早稲田大学第一文学部教授）は、「英語や仏語が敵性語として蔑視され、フランス文学などは、軟弱極まりないものとして蔑まれていた[25]」と振り返っているし、鈴木信太郎も「軍部の鼻息を窺つてばかりゐた文部省は、英語と仏語とを敵性語学だとして莫迦莫迦しい弾圧を加へた[26]」と回想している。やはり太平洋戦争期はフランス語にとって受難の時期だったのだ。なお、ここで言われている「敵性語」とは必ずしも明確な敵対関係にある国の言語という意味ではなく、敗戦国の軟弱な言語という程度の意味に取るべきだろう。あるいは「うさんくさい中立国人」の言語と言うべきか。

それにしても、いつ頃からフランス語の人気は落ち始めたのだろう。立教大学でフランス語を教えていた河盛好藏は、戦後になってこう述べている。

> 一九三九年（昭和十四年）九月一日に始まった第二次世界大戦で、フランス軍の旗色が次第に悪くなり出した頃から、フランスの人気はがた落ちになり、学校でもフランス語の学習を希望する学生の数は次第に少なくなってゆき、翌四〇年六月十三日のパリ開城頃には絶無になったので、早晩、フランス語の授業の廃止されるのは必至の情勢であった。その頃私は法政大学の予科にも出講していたが、この方では既に仏語教師の整理が始まっていた。私のような非常勤講師はこちらから進んで辞職することになった[27]。

一方、東京外国語学校の場合を覗いてみると、『東京外国語大学史』には「大正末期から昭和初期にかけては、まさに仏語部の全盛期だった」が、やはり第二次世界大戦が始まると事情が変わり、フランス語には「＜軟弱な言語＞、＜敵性語＞という烙印」が押された結果と

---

[24] ロベール・ギラン、前掲書、p. 136-137。
[25] 窪田般彌『一切合切みな煙』河出書房新社、2002年、p. 171。
[26] 鈴木信太郎『小話風のフランス文学』河出書房、1955年、p. 163。
[27] 河盛好藏『フランス語盛衰記・私の履歴書』日本経済新聞社、1991年、p. 109-110。

してこうなったとある。

> 仏語部の社会的な評判も落ちて、例えば一九四一（昭和十六）年の仏語部への志願者は一三五人だったのに対して、独語部は一八〇人だった（入学者はともに三一人）。そして同年十二月八日、太平洋戦争開始。［中略］授業は細々続けられていたが、楽しんでフランス語を勉強する雰囲気からはほど遠かった[28]。

もっとも、念のために『東京外国語大学史』の「資料編」にも当たってみると、翌1942年度には仏語部への志願者が154名、独語部は外国人１名を含む114名（入学者はどちらも31名）であるから[29]、そこだけを見れば「仏語部の社会的な評判」は持ち直しているようにも見える。特定の外国語の人気と国際情勢との相関関係はそれほど単純ではないということだろうか。この辺のことはもっとよく調べてみる必要がある[30]。

ともあれ、フランス語のみならず外国語全般の学習が軽視された時代であったことは確かだ。1941年12月まで英語、中国語、フランス語の三か国語についてはラジオ講座が開設されていたが、それが日米開戦後、終戦まで完全に中止されていたという事実は、外国語学習軽視の風潮を表す一つの象徴的な事例だろう。戦後に刊行された日本放送協会編『ラジオ年鑑』にはこう記されている。

> 外国語講座は昭和十六年度十二月迄は英語、支那語、フランス語があつたが十七年一月以来廿年八月の終戦迄の約四ヶ年の間、全く姿を消してゐた。このやうな一般国民の外国語に対する無関心と不勉強は、連合軍の本土進駐とともに、非常な不便を招来し、俄に英語熱の勃興を見た[31]。

また1942年には政府が高等学校の修業年限を一年間短縮する方針を打ち出したが、そうなれば当然、外国語教育も削減されることになるわけで、1942年11月15日、16日に開催された「第一回語学教育研究大会」ではこの問題が取り上げられ、ことに同大会内の「フランス語部会」はこれを重く受けとめた。参考までに、フランス語部会の議長を務めた東京大学仏文科教授の辰野隆による会議報告を引いておこう。（以下の引用中の「主催者」とは「第一回語学教育研究大会」の主催者たる「語学教育研究所」のこと。「英語教授研究所」が文部省内に設立されたのは1923年、それが1942年に英語以外の言語も研究対象とすることとして「語学教育研究所」に名を改めたのである[32]。）

---

[28] 『東京外国語大学史――独立百周年（建学百二十六年）記念――』東京外国語大学史編纂委員会編、発行：東京外国語大学、1999年、p. 576-577。

[29] 『東京外国語大学史　資料編三――独立百周年（建学百二十六年）記念――』東京外国語大学史編纂委員会編、発行：東京外国語大学、2002年、p. 873-874。

[30] ちなみにフランス敗戦後も日本で当分の間フランス文学の翻訳紹介は盛んに行われていた。杉捷夫は1941年５月に「最近三四ケ月の間に出たフランス文学関係の翻訳書を漁つて見て今更ながら、自分の予想を遥に立ち超える盛況にびつくりさせられた」と述べている。杉捷夫「最近の翻訳界（フランス）」『朝日新聞』1941年５月10日朝刊第５面。

[31] 『昭和二十二年　ラジオ年鑑』日本放送協会編、日本放送出版協会、1947年、p. 43。

主催者から出された問題に関し、主として高等学校に於けるフランス語教授について懇談の結果、次の通り、当局に対する希望を表明、これが伝達方を主催者に依頼することを申し合わせた。

「新制度による二年を以てしては、到底従来の成果を挙ぐることを得ずと雖も、次の如き方策を講ずればこの欠陥を或る程度まで補ふことを得べし。従つて次の諸項は是非ともこれを実現せられ度し。

一、毎学年の語学時間を尠くとも現制度以下に減ぜざるやうに取計られ度し。

二、分割授業を行ひ得るやう教授定員を増加せられ度し。

三、主要都市の特定の中学校の一クラスに佛語を課せられ度し。

四、大学各部学［ママ］に於いて語学講義を開設せられ度し。

五、教員の研究機関を設け、且教科書参考書の整備充実を計られ度し[33]。」

一方、外国語全般ではなく、フランス語を狙い撃ちにした教育削減案が実行されることもあった。もともと旧制高等学校ではフランス語は英語やドイツ語よりも冷遇されており、日米開戦時にフランス語を学べる高校は一高、三高、東京、浦和、静岡、大阪、福岡のわずか七校に留まっていたのだが、1943年には一高と三高以外のすべての高校でフランス語学級が廃止されたのである。後の東大仏文科教授の菅野昭正（1943年の時点で中学生、終戦直後に浦和高校入学）はこの「文部省の決定した高校の外国科目改変に関する浅慮の国策」をこう説明する。

ドイツは同盟国だからドイツ語は安泰、英語は真正面の敵性語学なのに流通範囲のひろさが買われたのか、授業時間の削減で片がついたらしい。しかるに、フランス語は敵性語である上、軟弱、頽廃的などと汚名を着せられたのか（それには、アヴェック、ランデーヴゥなどが歪められて濫用されたり、デカダンスのような健全な戦時風俗を壊乱する不穏の語が、幅をきかせていると買いかぶられたりしたせいもあったのだろう）、いちばん厳しい受難に曝される。当時、フランス語を履修することができた高校は七校（高校の数は私立をふくめて全国で三十六校）、そのうち最上位の序列にある一高と三高については、辛うじて存続が認められたが、他の五校では（浦和はその部類）、完全に廃止されることになった[34]。

この措置に対して辰野隆は1943年２月に帝国大学新聞に寄せた一文「高校教育とフランス語」で反対の声を挙げた。辰野は「今から二十八、九年も前」、つまり彼が高等学校二年生のときに初めて原語で『レ・ミゼラブル』の一ページ目を読んだときの「僅か一頁ではあつたが読み得たという征服感」と「真に新鮮な知的感激」を思い起こしつつ、こう述べている。

---

[32] 一般財団法人語学教育研究所のHPの「沿革」を参照のこと。https://www.irlt.or.jp/modules/pico/content0001.html（2022年４月17日閲覧）

[33]『語学教育』1943年１月、p. 266。

[34] 菅野昭正「明日への回想　５・受験極楽」『ちくま』2016年12月、p. 52。

惟ふに、高等学校の外国語（英・独・仏）学習は海外の知識に向つて開かれた窓である。知識に目覚めた高校生はこの窓を通して、若草が日光を吸うやうに、海の彼岸の知識を吸収するのが重い務めの一つでもあり又悦びでもあつたのである。然るに今やその知識の窓は、更に広く、世界に向つて大東亜に向つて、開かるべき好機を迎へながら、惚然として、殆ど閉ざされようとしてゐる[35]。

辰野がここで「大東亜」云々と述べているのは仏印に言い及ぶための布石であるが、その点に関しては後述しよう。辰野はフランス語学級廃止に賛成した教育関係者にその理由を問い、納得できる返答を得られなかったため、「自ら故ら理由らしきものを捻出して考え」てみて、「敗北国の国語は学ぶに足らず」と「仏蘭西は自由主義思想の淵叢なり」の二つを思いついたと言う。もちろん、彼はその二つの理由がともに根拠を欠く俗説に過ぎないことを説くのである（曰く、第一次大戦ではドイツも敗北国になったが、ドイツ語の学習をやめるのが愚かであるのは論を俟たない。フランス語も同様である。また、フランスには自由主義思想もあるが、ジョゼフ・ド・メエストルの絶対君主主義もある。この国は「極端なる革命思想から深厚な加特力主義に至るまで備はざるはなし」なのだ、等々。）この文章の中で辰野はフランス語学級廃止に反対の声を挙げなかった高校の校長たちを痛烈に批判しているが、福岡高校の校長だけは別だと断っている（「フランス語、フランス文化に深き理解を有する福高校長は、恐らくフランス語学級の存続を主張して已まなかつたでもあらう。それにも拘らず、結極多数決によって、決をとるまでもなく、理由ある主張は理由を主張し得ざる多数者に依つて退けられたのであらう。」）。辰野は名指ししていないが、当時の福岡高校校長はフランス語学者の折竹錫である[36]。

辰野隆に続いて河盛好蔵も『文芸』1943年４月号に「外国文学の窓」と題する一文を寄せ、フランス語学級の廃止に異を唱えた。「外国文学の窓」というタイトルは、辰野隆が高校の外国語学習を「窓」に例えたことを踏まえている。

河盛は冒頭で「私たちフランス文学の研究者に大きなセンセイションを引き起こした事件が最近二つあった[37]」と述べる。その一つは渡辺一夫によるラブレー『ガルガンチュワとパンタグリュエル　第一之書』の翻訳刊行であり[38]、もう一つが一高と三高を除くすべての高校でフランス語の教授が廃止されたことである。前者については「単なる翻訳を通りこして、立派な学問的業績であり、わが国のフランス文学界が産んだ一大モニュメントである[39]」と讃えているが、この賛辞は今でもそのままうべなうことができるだろう。冒頭に計六章からなる精緻な「解説」（１フランソワ・ラブレー小伝、２『ガルガンチュワとパンタグリュエル』物語中に於ける『第一之書ガルガンチュワ』物語の位置について、３『第一之書ガルガンチュワ』物語が発行上梓された時代環境について、４原典について、５本書の翻

[35] 辰野隆「高校教育とフランス語」『帝国大学新聞』1943年２月22日、p. 2。

[36] 折田悦郎「旧制福岡高等学校関連資料について」九州大学学術リポジトリ貴重文物講習会目録2008-11.pdf（kyushu-u.ac.jp）p. 1。（2022年４月12日閲覧）

[37] 河盛好藏「外国文学の窓」『文芸』1943年４月、p. 54。

[38] ラブレー『ガルガンチュワとパンタグリュエル　第一之書　ガルガンチュワ物語』渡辺一夫訳、白水社、1943年。

[39] 河盛好藏「外国文学の窓」前掲書、p. 54。

訳及び略註について、６挿絵・地図について）を収めるこの訳書は、とりわけ有名な「テレームの僧院」のくだりの訳文、解説、訳注によって、ルネサンス期のユマニストの夢を鮮やかに蘇らせている。一方、後者、即ち高校におけるフランス語教室の廃止については、河盛はこれを「甚だしい愚劣なる政策[40]」と呼び、

> 一人でも多くの人間が外国語を、更にそれを通じて外国文学を研究しようとすることは、国民の、従って国家の頭脳と精神が常に若々しく、柔軟性に富んでゐることを示すものであつて、邦家のためにまことに慶賀すべきことであり、その窓を閉ざすが如きことのいかに理由のない暴挙であるかが理解されるであらう[41]。

と述べているが、それはそれとして、面白いのはむしろこの後に続く補足の一節だろう。

> また私たちは、この海外に開かれた窓は、逆に外国人がこれらの窓を通じて日本を理解する通路である事を知つてゐなければならない。従来の外国文学者のこの点に於ける無自覚はこの際大いに反省されなければならないであらう。それは、わが国の文学を海外に紹介し、移植することが、十分に活発ではなかつたといふことを意味するのではない。もちろん、その事の反省も大いに必要ではあるが、それよりも一層大切なことは、外国の文学を輸入紹介する場合に、いかなる種類の文学を摂取するかを示すバロメーターが、そのまま外国人をして、わが国の文化の水準を推量せしめる基準となつてゐたといふ恐るべき事実に対する無自覚なのである。［中略］『ガルガンチュワ』翻訳の意義を私が特に重大視する理由も全くここにあるのである。この大戦争の最中に、このやうな生命力に溢れた、健康無比な、哄笑の文学を私たちが読んでゐるという事実は、百の宣伝よりも、遥かに敵国の、しかも有識者の心胆を寒からしめるのである[42]。

戦時における外国文学の研究・翻訳の意義をアピールするためのレトリックの一つをここに認めることができる。当時、河盛好藏は情報局の管轄下にある統制団体、日本出版会の学芸課に勤務していた[43]。「出版社から提出された企画届を厳密に審査して、それの可否を決定する会議」に月に一回出席し、「たくさんの企画書の内容を説明し、その本が戦力増強に役立たない悪書ではないことを説明する」という「実に骨の折れるイヤな仕事」に従事していたのだが[44]、渡辺一夫の『ガルガンチュワ』の翻訳に託けて披露した上の理屈も、その「骨の折れるイヤな仕事」を通して身につけたものかもしれない。

付言すれば、高校のフランス語学級の廃止によって不利益を被ったのは高校生だけではなく、当然ながら高校のフランス語の教員にもその害は及んだ。辰野隆が

---

[40] 同前、p. 55。
[41] 同前、p. 56。
[42] 同前、p. 56-57。
[43] 井口一男編「河盛好藏年譜」『現代日本文學大系74　中島健蔵　河盛好藏　中野好夫　桑原武夫　集』筑摩書房、1972年、p. 401。
[44] 河盛好藏『フランス語盛衰記』前掲書、p. 112。

> 従って、フランス語担当の教授講師――不幸にもその悉くが一粒選りの良師である――は、早きはこの四月、晩くも来年の夏までには、彼らが心血が傾注した高等学校から去らねばならなくなつた[45]。

と書いたとき、彼の脳裏には高校でフランス語を教えている自分のかつての教え子たちがあったかもしれない。例えば平岡昇。福岡高校で石川淳にフランス語を学び、東大仏文科に進学して辰野隆の教えを受けた平岡昇は、卒業後、浦和高校でフランス語の教師をしていた。フランス語学級廃止の憂き目を見た平岡について菅野昭正はこう書いている。

> 教えるべき科目を奪われた平岡先生は、こうして退職を余儀なくされる。いわば敵性語学を教えていた罪を負う流謫の身となり、福島県の山間の農業の学校の国語教師として、戦争末期の日々を過ごすうちに、敗戦が来る[46]。

平岡昇は戦後すぐに浦和高校に復職し（菅野昭正はそのときの教え子）、後に東大、さらに早稲田大学で教鞭をとるが、仮に日本の敗戦が遅れ、「国語教師」としてのキャリアが長引いていれば、名著『平等に憑かれた人々　バブーフとその仲間たち』が流産していた可能性もあるだろう。

４．フランス語教育の新たな使命？

戦前・戦中のフランスはアフリカ大陸その他に広大な保護領を有する一大植民帝国だったわけだが、当時、日本のフランス文学者たちはそのことをどう捉えていたのだろう。おそらく彼らの興味の向かう先は、もっぱら仏印に限られていたのではないだろうか。

日本のフランス文学者は日本軍の仏印進駐の知らせをまずは「徴用される危険」の高まりとして受けとめたらしい。当時、東京大学仏文科の講師だった中島健蔵の『回想の文学』にはこうある。

> 徴用される危険は、一九四〇年から四一年にかけての日本軍の「仏領インドシナ」進駐のあたりからはじまった。英語やドイツ語にくらべて、日本では、フランス語のできる人間の数が少なかった。幕末には、フランス士官による幕府陸軍三兵伝習などがおこなわれていたが、一八七〇年（明治三年）の「普仏戦争」でフランスがプロシアに敗れて以来、フランスを「文弱」の国と見る傾向がはじまり、第一次世界大戦以後、いくらかは見方が変わった程度であった。「仏印」進駐の目的はわからなかったが、軍事行動がはじまってみると、何となく、強制的に軍の嘱託にでもされそうな気がしはじめたのであった。そこへ、開戦前の文学者徴用である。井伏鱒二、武田麟太郎、阿部知二、今日出海など、身近な友だちが、船で南方に送られつつあるという噂は、文学なかまの間にひろく伝わっていた。そして、さらに、十二月八日の「詔書」である[47]。

---

[45] 辰野隆「高校教育とフランス語」前掲書。

[46] 菅野昭正、前掲書、p. 52。

一方、仏印の存在は、日本におけるフランス語学習の新たな動機にもなり得た。中島健蔵は『回想の文学』の中に1941年12月９日の自分の日記を引用しているが、それによると、その日中島は「東大の宣戦詔書奉読式」に出席した後、辰野隆、鈴木信太郎、渡辺一夫と白十字堂に茶を飲みに行ってこんな話をしたという。なお、文中の「岸田君」は大政翼賛会の文化部長を務めていた岸田國士のこと。

> 辰野、鈴木、渡辺の三人と「白十字」でお茶を飲む。一人前二個の洋菓子だけはめったに切らしていない。眠気のさめないコーヒー。雨が降り出した。高等学校の課程からフランス語を除くという説がある由。これだから文部省は存在の意義がない。「仏印」に軍隊を出している最中に、フランス語を封じるばかがあるか。「君も今度岸田君に会ったら、翼賛会あたりでその愚を指摘するようにいってくれたまえ。」妙な買いかぶりだ。翼賛会には、それだけの実力はない[48]。

東大仏文科の教員たちが日米開戦の翌日に、高等学校の課程からフランス語が除かれることを危惧しつつ、仏印の存在をフランス語教育存続のための口実として意識していたことが伺える。フランス語の受難の時代を乗り切る手立ての一つをそこに認めていたのだろう。

もっとも、このとき一緒に茶を飲んだ四人が同じ考えを共有していたとは限らない。「『仏印』に軍隊を出している最中に、フランス語を封じるばかがあるか。」という言葉ははっきり他者の言葉として提示されているわけではないが（鍵カッコで括られていない）、書き手の中島健蔵自身の意見というよりむしろ、「君も今度岸田君に会ったら、翼賛会あたりでその愚を指摘するようにいってくれたまえ。」と発言した人物の意見と取るのが妥当だろう。（この文中の「君」がおそらく中島健蔵。中島健蔵は当時、大政翼賛会文化部の提唱による地方文化運動に参加し、岸田國士と連絡を取りあっていた[49]。）では、「君も今度岸田君に会ったら［……］」というのは誰の発言だったのだろう。1901年生まれの渡辺一夫は、ひと回り近く年長の岸田國士（1890年生まれ）をおそらく「岸田君」とは呼ばない。辰野隆の発言だったのではないだろうか。というのも、辰野隆は後に一高と三高以外のすべての高等学校でのフランス語学級の廃止に異を唱えた際、フランス語教育の重要性を訴えるために仏印（および泰）を引き合いに出しているからだ。

> ［……］日本の現在又は近き未来の緊急問題として、泰国と仏印とは如何。試みに大東亜の地図を一瞥せられよ。日本はこの両者とは現在も将来も固く手を握って、中華民国と共に共栄の努力を致さねばならぬ事は改めて申すまでもない。泰のピブン首相はじめ有力な為政者が如何に高くフランス文化を評価しつつあるか。しかして仏印の諸制度がフランス文化に基いて定められているのは当然すぎる。且つ泰国並に仏印に対する独乙の文化工作は既に始められてゐるのである。私はナチス政府がフランス文化に精しき幾多優秀なる党員を泰国仏印に派遣して独乙の将来の東亜政策の基祉を築くに汲汲として

[47] 中島健蔵『雨後天晴の巻　回想の文学⑤　昭和十七年～二十三年』平凡社、1977年、p. 14-15。
[48] 中島健蔵『兵荒馬乱の巻　回想の文学④　昭和十四－十六年』平凡社、1977年、p. 310。
[49] 同前、p. 301以下を参照のこと。

ゐると幾度か聞き及んでゐる。我等は大東亜政策の将来を慮って、今より後に、泰国や仏印に雄飛すべき人材を養う用意を欠いてよいものであらうか。高等学校のフランス語学級はその有力な門戸の一つではなからうか[50]。

もちろん、こういう着想は辰野隆の専売特許ではない。1942年11月の「第一回語学教育研究大会」では、理事長の千葉勉が開会の辞の中で外国語（英語、ドイツ語、フランス語、中国語）の運用（会話）能力の涵養の重要性を訴えながら、

又フランス語について見ても、日本の近くに仏印があるといふ事実はフランス語の実用性に新しい一面を加へることになると思ふ[51]。

と述べている。

こうした情勢下に、それまで存在しなかったタイプの語学教材が生まれもした。

先に太平洋戦争中は外国語学習が軽視されていたと述べたが、実はあの時代は、それまで日本に多くの学習者がいなかったアジア諸国の言語に注目が集まった時代でもあった。そんな時代状況を色濃く反映しているのが1942年から1943年にかけて外語学院出版部から刊行された「大東亜共栄圏会話叢書」である。これは大東亜共栄圏に組み込まれるべき国々の言葉の学習参考書のシリーズで、『南支華僑会話要訣：日本語・広東語・福建語』『比律賓会話要訣：日本語―西班牙語―タガログ語』『泰会話要訣：日本語―泰語―英語』『ビルマ会話要訣：日本語－ビルマ語―英語』『東印度会話要訣：日本語―和蘭語―馬来語』『昭南馬来会話要訣：日本語－馬来語－英語』などから成るが、その中に『仏印会話要訣　：　日本語－安南語－仏蘭西語』もある。『仏印会話要訣』の著者は久持義武という人物である。

著者の意図は序文に明快に示されている。

大東亜戦争の勃発を契機として仏印の変貌は殊のほか著しく、現今では共栄圏建設の有力なる一員として真摯な協力を致してゐることは周知のことながら同慶に堪へない所で、将来両国間の諸関係が一層緊密強化されるは推察に難くない。この関係を育成向上させる要素には多々あることであらうが、彼我の意志疎通から完き相互認識の把握へと導びく言語の交流も有力な要素の一たることは否めない事実である。

然らば、仏印との言語交流は如何と云へば、我は進んで当領の主要言語たる安南語と仏蘭西語とを知り、彼には正しき日本語の習得をすすめるにあるは言を俟たぬ所である[52]。

この本は本格的な語学参考書というより、むしろ（著者の言葉を借りれば）「携帯用簡易日常会話集」[53]であり、フランス語とベトナム語の文法のごく簡単な説明の後、会話で使えそ

---

[50] 辰野隆「高校教育とフランス語」前掲書。

[51] 千葉勉「第一回語学教育研究大会記録　開会の辞（要旨）」『語学教育』1943年１月、p. 277。

[52] 久持義武『仏印会話要訣：日本語－安南語－仏蘭西語』外語学院出版部［大東亜共栄圏会話叢書］1942年、p. 1。

うな内容の日本語文（例えば「日本へ行つて見たいと思ひませんか」「あなた方は仏蘭西人とおつきあひなさる機会が大変多いせう［ママ］？」「ショロンは支那人町ださうですね」[54]など）が並び、そのベトナム語訳とフランス語訳が示される。なお、日本語の例文にはかならずローマ字の表記が添えられているが、これは「仏印人の日本語習得に便ならしめるやう附加したもの」[55]である。つまり、この本はベトナム語およびベトナムの宗主国の言語に関心を持つ日本人向けの参考書であると同時に、大東亜共栄圏の共通語となるべき日本語の会話帳でもあり、読者としてベトナム人を想定してもいるのだ。

著者の久持義武について筆者（渋谷）は殆ど何も知らないが、本の表紙には著者の肩書が「前東京高等商船学校講師」と記されている。久持はやはり戦中にノエル・ヌエット（東京外国語学校などで教鞭をとったフランスの詩人、画家）のエッセー集を翻訳し、『日本風物誌』の題で刊行しているから、フランス語に通じていたのはまちがいない[56]。ベトナム語については、本人が『仏印会話要訣』の序文で「もとより浅学菲才の致す所不十分の点多々なしとしないが、例へば研究資料の乏しい安南語の如き、得難き安南人の直接援助を得て漸く完成するなど多大の努力を払ったことだけは附記させていたゞきたい」[57]と述べている。

この本の中で特に目を引くのは、巻末近くに置かれた「宣撫用語」と題する章だ。そこには無残な脅し文句と、そのベトナム語およびフランス語の訳がずらりと並んでいる。いくつか拾っておくと、「この辺に敵性のある奴が居るだろう」「嘘をつくと殺すぞ」「我々は決して善良な住民には危害を加へない」「スパイは銃殺に処す」「英米人の云ふことを聞くな」といった調子である[58]。まだ見ぬ国への憧れや、「真に新鮮な知的感激」（辰野隆）とはおよそ縁のない本だったようだ。

5．フランス語の教科書

実はこの他にも当時、フランス語の教科書、参考書の類いはそれなりの数刊行されている。1921年に初の本格的な仏和辞典『模範仏和大辞典』を出すなど戦前からフランス語、フランス文学関連の出版に力を入れていた白水社であれば、1941年から1945年までの間に八点のフランス語の教科書を出版している（ただし1944年と1945年はゼロ）[59]。本稿の終わりに、戦時下に出たフランス語の教材をいくらか眺めておきたい。

高校のフランス語の授業が廃止された際、辰野隆に続いて反対の声を挙げた河盛好藏は、その前年の1942年に白水社からフランス語の教科書『現代フランス語読本．３』を出していた[60]。目次を写しておこう。カッコ内は筆者（渋谷）による仮の訳である。

---

[53] 同前、p. 3。
[54] 同前、p. 136以下。
[55] 同前、p. 3。
[56] ノエル・ヌエット『日本風物詩』久持義武訳、三学書房、1942年。
[57] 『仏印会話要訣：日本語－安南語－仏蘭西語』前掲書、p. 2。
[58] 同前、p. 338-345。
[59] 『白水社百年のあゆみ　出版物総目録』https://www.hakusuisha.co.jp/files/topics/hyakunen/ayumi100.pdf（2022年４月22日閲覧）

1. Paroles du Maréchal（元帥の言葉）
2. Celui qu'on attendait : Philippe Pétain. H. Bordeaux アンリ・ボルドー「待たれていた人、フィリップ・ペタン」）
3. Aux morts des armées de la République. (poème) P. Claudel（ポール・クローデル「共和国軍の死者たちへ」［詩］）
4. L'Enfance. Ch. Péguy(シャルル・ペギー「幼年時代」）
5. L'écolier sans correspondant. F. Jammes（フランシス・ジャム「保証人のいない生徒」）
6. Le Sabotier. (poème) E. Verhaeren（エミール・ヴェルハーレン「木靴工」）
7. L'Homme sans tête. A. Suarès（アンドレ・シュアレス「頭のない人間」）
8. Ballade de Florentin Prunier. (poème) G. Duhamel（ジョルジュ・デュアメル「フロランタン・プリュニエのバラード」［詩］）
9. Lettre à une jeune femme de qualité. A. Maurois（アンドレ・モーロア「或る秀でた若い女性への手紙」）
10. Borée. J. Kessel（ジョゼフ・ケッセル「ボレアス」）

Notes（編者註）

冒頭の「元帥の言葉」には、ドイツと休戦協定を結ぶことを国民に告げた1940年６月16日のラジオ演説を始めとして、フィリップ・ペタンが行った四つの演説の文章が収録されている。この章とセットになっているのが作家アンリ・ボルドーによるペタン頌（「待たれていた人、フィリップ・ペタン」）であり、この二つはどちらも内容的に時局に直接かかわるものだが、他はすべて第二次世界大戦が勃発する前に書かれた文学的テキストである（クローデルの詩は今次の戦争ではなく、第一次世界大戦の死者を歌ったもの）。この読本でフランス語の文章に和訳は添えられておらず、若干の訳注が付されているだけだが、編者はテキストの選択には気を遣ったようで、語学的に比較的平易な文章が揃っている。ヴェルハーレンなどはときに大意を捉えることすら骨の折れる難解な詩を書く人であるだけに、ここに収録された「木靴工」の語法の平明さは際立って感じられる。一通り文法を学び終え、いよいよ文学作品の読解にチャレンジしようとする中級者向けの読本として評価できる。

一方、1943年にやはり白水社から出た鈴木力衛編『時事仏蘭西語読本』はタイトルから想像がつくように同時代性が格段に強く、文学的な文章は収められていない。「緒言」に「本書はフランス語の基礎知識を有する学習者たちに、新聞雑誌、ラジオ・ニュース、あるいは電文等の時事フランス語を読む上に必要な力を比較的短期間に与える目的で編んだもの[61]」とあるが、実際、この読本は新聞雑誌の記事を集めた第一部、ラジオ放送用のニュースの原稿を集めた第二部、電報のニュースを集めた第三部からなり、どの章にも戦局に関する文章が多く採録されている。例えばLe Bombardement aérien de Malte（マルタ空爆）、

[60]『現代フランス語読本. ３』河盛好藏編、白水社、1942年。白水社の出版物総目録によると、河盛好藏編の『現代フランス語読本』は1938年に、その続巻は翌39年に、つまり、いずれもフランス敗戦の前に出ていた。『白水社百年のあゆみ　出版物総目録』前掲書、p. 423、425。

[61]『時事仏蘭西語読本』鈴木力衛編、白水社、1943年（「緒言」から）。

Singapour a capitulé sans conditions（シンガポール無条件降伏）、Vichy dément la fausse nouvelle lancée par les Britanniques（英国人が流した偽情報をヴィシー政府が否定）といった具合である。各章の冒頭には文章の出典などに関する断り書きがあり、第一部には「ここに採録した記事は主として Le Journal de Shanghai、Le Figaro、Le Mois 等から引用したが、中には雑誌フランスの Cosmorama の欄から借用したものもある[62]」とある。（「雑誌フランス」とは白水社の月刊誌『ふらんす』のこと。当時の『ふらんす』は大抵巻末近くに「コスモラマ」と題する時事ネタの記事を載せていた。）また、第二部には「この章に収めた記事は全部東京放送局の海外向ニュース原稿である。放送用のニュースが聴取者の耳に愬へかけるものであるために、特殊なニュース以外は新聞記事に比べて著しく簡潔であり、かつ passé simple が殆ど使用されないことに注意されたい[63]」とあり、第三部には「この部分の記事はすべて同盟通信社の海外向け電報ニュースに材を仰いだ[64]」とある。さらに第三部には電報の文章の特徴（前置詞の省略等）の解説も付されている。フランス語の文に和訳は添えられていないが、注が実に詳細で充実している。編者の鈴木力衛は後の学習院大学教授であり、モリエール研究者として知られるが、『時事仏蘭西語読本』の奥付の編者略歴の欄には「現在官立無線電信講習所教官、アテネ・フランセ講師」と記されている。

白水社のもの以外にも時代を感じさせるユニークな教材を一つ挙げておく。陸軍大学校将校集会所の語学教官が編纂した『軍事語学　仏蘭西語編　第一巻』（雄風館書房、1943年）はもっぱら陸軍大学校の学生を対象としたフランス語読本である。やはり目次を写しておこう。（カッコ内に入れた訳文は、「目次」そのものには現れないが、各章の冒頭で編纂者たちによって示されたもの。）

I　Avant-propos : 語学上達の秘訣
Première Partie
II　Opérations sur le front occidental du 10 mai au 25 juin 1940—Commentaire sur le rapport du ministère de la Guerre—（一九四〇年五月一〇より六月二五の間に於ける西部正面作戦—仏国陸軍省報告の解説—）
III　Le combat des chars dans les lieux habités（住民地に於ける戦車戦闘）
Deuxième Partie
IV　Volonté de vaincre : première condition de la victoire (Foch)（勝たんとの意思、即ち勝利の第一条件）
V　La chose essentielle (von Seeckt)（肝心・かなめ・な事）
VI　Epilogue : 何事にもその季節あり

Première Partie（第一部）に収められているのは軍事作戦に関する文章で、Deuxième Partie（第二部）は主に軍人の心構えを論じた文章である。第二部 IV の Foch はフランスの軍人でアカデミー・フランセーズの会員でもあったフェルディナン・フォッシュ、第二部

[62] 同前、p. 1。
[63] 同前、p. 18。
[64] 同前、p. 68。

Ｖの von Seeckt はドイツの軍人ハンス・フォン・ゼークトである。ゼークトが1929年に発表した『一軍人の思想』は、1932年に仏訳がフランスで刊行された[65]。『軍事語学　仏蘭西語編　第一巻』に採録されているのはその仏訳本の最終章である。ゼークトの著作は日米開戦前後に日本でも相次いで翻訳紹介され[66]、小林秀雄が「歴史の魂」（初出は『新指導者』1942年７月号）で好意的に論じたりもしている[67]。フランス語の読本にわざわざドイツ人の文章の仏訳を載せたのは、そういう背景があったからだろう。

目次だけを見るといかにも物々しいが、実は各章の末尾に（目次には示されていないが）フランス語のユーモラスな小噺が紹介されていたり、文学的、哲学的な短いテキスト（レミ・ド・グールモン、ジャン＝マリ・ギュイヨーの断章）とその翻訳が掲げられていたり、と、いわば「ポーズ」に相当するページも設けられていて、必ずしも「軍事語学」一辺倒の本ではない。編纂に当たった語学教官の苦心の現われと見るべきだろうか。VI の Epilogue（終章）は外国語学習の心得を説いた日本語の文章で、注に「本文は関根教授が文芸春秋社の需に応じて昭和十六年の同誌二月号に寄せた随筆である」と断ってあるが、この「関根教授」とはモンテーニュの翻訳・研究で知られる関根秀雄である。関根秀雄は1920年から陸軍大学校の教官を務め、ヴィニーの「軍の偉大と服従」やフランシスク・サルセの「巴里の包囲」（Francisque Sarcey, *Le Siège de Paris*）などを教材にフランス語を教えていた[68]。「終章」だけではなく、この本全体の編纂に関根が関わっているものと考えてよいだろう[69]。「終章」で関根は外国語学習の重要性を説き、自国語のみに執着する態度を悪しき国粋主義と見做した上で、もしモンテーニュが生きていたら、と仮定してこう締めくくっている。

> 又若し彼［引用者注：モンテーニュ］をして日本語を語らしめたならば、「末梢的国粋主義は興国にあらず亡国である。」なんて云う洒落を飛ばしはしなかつたらうか。「死は

---

[65] ドイツ語の原書は Hans von Seeckt, *Gedanken eines Soldaten*, Verlag für kulturpolitik, 1929。仏訳書は Hans von Seeckt, *Pensées d'un soldat*, Éditions du Cavalier, coll. Les Mœurs et l'esprit des nations ; n°3, 1932。

[66] 『一軍人の思想』篠田英雄訳、岩波書店、岩波新書67、1940年：『モルトケ』斎藤栄治訳、岩波書店、軍事文化叢書、1943年：『ドイツ国の基本的諸問題』斎藤栄治訳、育生社弘道閣、1943年。

[67] さらに小林秀雄は『文學界』1943年９月号に「ゼークトの『一軍人の思想』について」を発表している。ただし『軍事語学　仏蘭西語編　第一巻』の奥付には「昭和十八年三月二十日　第一版発行」とあるから、小林秀雄の「ゼークトの『一軍人の思想』について」が語学教科書編纂者のテキスト選択に影響を及ぼしたとは考えられない。

[68] 関根秀雄は教材に用いたこの二つの作品に触れつつ後にこう回想している（回想されているのは日米開戦より前の時期であると考えられる）。「そこ［引用者注：この二つの作品のタイトル］にはミリテール［引用者注：「軍隊の」の意］とかシエージュ［引用者注：「包囲」「攻囲戦」の意］とかいう語があるので、何のお咎めも蒙らなかった。学生たちも、午前中は兵学教官からミッチリ軍事学の講義をきかされているので、かえって午后の語学の授業には何かしらフランス文学の匂いをかぐことを悦んだ。わたしの陸大勤務は、必ずしも袴を着込んだ態のものではなかった。学生も皆大人だから、疲れると適当にダルマ・ストーヴを囲んで雑談をする。それも今となってはなつかしい昔の思出である。」「わたしのフランス文学」『フランス文学とわたし』前掲書、p. 252–253。

[69] 第二章に収められた二つの文章の邦訳を関根秀雄が担当したことは、邦訳の末尾に「（関根）」と記されていることから推測がつく。第一章の二つの文章の翻訳の末尾には「（木内）」とあるが、この人物については不詳である。

人生の bout 端つこであるがその but 目的ではない」と云ふような語呂合せも、いさゝか彼の味噌であつたから[70]。

モンテーニュ（流）のダジャレによる精一杯の時代批判と言うべきだろう。

以上、太平洋戦争中に刊行された三つのフランス語教材を眺めてみた。蛇足的に付け加えると、戦時下にフランス語を学んだ学生が、必ずしも戦時下に刊行された教科書を使用して勉強したとは限らない。窪田般彌は「昭和十七、八年頃」に「渋谷宮益坂の古本屋で堀口大学著『仏蘭西現代詩の読み方』を発見」したという[71]。『仏蘭西現代詩の読み方』はヴァレリーやコクトーなど十人の詩人の作品計六十六編を収録し、細かい注と日本語訳を付した本で、1935年に第一書房から出版された。「フランス詩に激しい情熱を燃やし[72]」ていた若者にとって、またとないフランス語の教科書になっただろう。

（2022年４月30日受理，５月11日掲載承認）

[70]『軍事語学　仏蘭西語編　第一巻』陸軍大学校将校集会所編、雄風館書房、1943年、p. 109。
[71] 窪田般彌『フランス文学夜話』青土社、1981年、p. 208。
[72] 同前。